

# エレニの旅

2005(平成17)年6月5日鑑賞(OS劇場C・A・P)



監督・脚本=テオ・アンゲロプロス/出演=アレクサンドラ・アイディニ/ニコス・プルサニディス/ヨルゴス・アルメニス/ヴァシリス・コロヴォス/エヴァ・コタマニドウ/ミハリス・ヤナトス/トゥーラ・スタプロウ (フランス映画社配給/2004年ギリシャ・フランス・イタリア・ドイツ合作、ギリシャ映画/2時間50分)

……テオ・アンゲロプロス監督は、1970年の『再現』以降、数々の名作を発表した著名な映画監督。20世紀のギリシャの歴史を、難民の娘エレニを中心に描く2時間50分の大作は涙の感動作だが、その歴史的背景の勉強が不可欠だし、じっと観ているのは結構しんどい映画……。観客席はほとんど年記者だし、新聞評を見ても難解な解説ばかり。これでは若者にはちょっと手が出ないはず。何とかしなければ……？



## テオ・アンゲロプロス監督について勉強

テオ・アンゲロプロスは1935年にアテネで生まれた監督(巨匠)で、1970年の『再現』以降、数々の名作を発表しているとのこと。とりわけ、『1936年の日々』(72年)、『旅芸人の記録』(74-75年)、『狩人』(77年)は「ギリシャ現代史3部作」と位置づけられるものらしい。

また、『アレクサンダー大王』(80年)ではベネチア国際映画祭で金獅子賞を受賞し、『永遠と一日』(98年)ではカンヌ国際映画祭でパルムドール賞を受賞しているとのこと。

ところが、残念ながら私はこれらの作品を1本も観ていないし、アンゲロプロス監督の名すら知らなかった。そもそもギリシャ映画が日本で公開されることが少ないのだから、むしろそれが当然だと思うが、この映画を観てはじめてアンゲロプロス監督が日本の巨匠といわれている溝口健二、小津安二郎らと共通している「長まわし」という撮影手法を使っているのがよくわかった。

それは何も特別な手法ではなく、要するにカメラを長時間動かさず、対象物が動くのをじっと写していくというもの。そのため、現代的なハリウッド映画のスピードとは全く異質な映像となるのは当然だし、相対的に映画の時間も長くなる。

こんなギリシャ生まれの巨匠をこの映画ではじめて知ることができたのは大きな成果……？

## 新聞評を読んで……

この『エレニの旅』が大阪で公開されているのはOS劇場C・A・Pの1館だけだが、新聞評では、私がスクラップしただけでも5月10日付朝日新聞（石飛徳樹）、5月30日付日本経済新聞・夕刊（野崎歓）、6月1日付朝日新聞夕刊（浅野潜）がある。そしてその内容はいずれも絶賛！ しかし私はこれらを読んでも、正直なところこの映画が一体何を描いているのかよくわからなかった。

また、パンフレットには、加藤周一の「映画と空間」という解説があるが、これも非常に難解。

そしてパンフレット冒頭には、アンゲロプロス監督自身が「地に降る涙のように」という文章を載せているが、これもまた難解。ギリシャ哲学を生んだギリシャ（人）はやはり抽象的、哲学的な思考が得意なのか……とも思うが、正直私にはそこに書かれてあることはよくわからない。

そう思いながらパンフレットや新聞評をよく読み込んでいくと、新聞評の中にはパンフレット中に書かれてあるキーワード、たとえば「追放」「別離」「彷徨」などの言葉がうまく散りばめられていることもわかる。

もちろん、これらの新聞評の執筆者たちは大ベテランの文学者や映画評論家であり、アンゲロプロス監督作品についても詳しいのだろうが、それならばもう少し一般的な日本人にもわかりやすく解説してもらいたいと思うのだが……。

## この映画の難しさその1 ギリシャ難民とは？

この映画の冒頭シーンは、アンゲロプロス監督独特の「長まわし」。

その舞台は1919年のギリシャのテサロニキ湾岸の荒れた土地。そしてそこに登場してくるスピロス（ヴァシリス・コロヴォス）に率いられた一団の人々は、ロ

シアのオデッサからの難民とのこと。スピロスの傍に寄り添うのが、妻のダナエ（タリア・アルギリウー）と2人の子供。それが5歳の息子アレクシス（ニコス・ブルサニディス）と3歳のエレニ（アレクサンドラ・アイディニ）だが、エレニはオデッサで両親を失った孤児ということだ。

このオデッサという土地は、南ロシアの黒海沿岸にあるギリシャ人が築いた町ということだが、私にはまずその位置がさっぱりわからない。

そして1905年にはじまったロシア革命（1904年にはじまった日露戦争が1つの契機となった）は1917年の「2月革命」と「10月革命」によって「完成」したが、このロシア革命の影響によって、オデッサのギリシャ人たちが追われて難民になったというストーリーも全く馴染みのないもの。

ホントは、このギリシャ難民の悲惨さがわからなければ、この映画をきちんと理解することはできないのだが……？

## この映画の難しさその2 ギリシャ現代史

1930年代に入ってからドイツでのナチスの台頭や、日本の中国への進出（侵略）は比較的良好に知られているが、イタリアでのムッソリーニの台頭については、日本人はあまり具体的に知らないはず。

まして、その当時、ギリシャがイタリアやドイツとどのように戦っていたのか、そしてイタリアが敗れ、ドイツが敗れた後、ギリシャで1946年以降に発生した、王制を支持する勢力と民主主義を求める勢力との「内乱」がどんなに悲惨なものだったか。このようなギリシャの現代史について、日本人はほとんど知らないのが実情だろう。

そしてホントは、このギリシャ現代史の基本的流れがわからなければ、この映画をきちんと理解することはできないのだが……？

## ギリシャ人は気が長い……？

アンゲロプロス監督は、20世紀を総括する作品を作るべくこの映画にチャレンジしたが、あまりに長くなりすぎたために3部作とすることになり、この『エレニの旅』はその第1部とのこと。

ところが、その第1部だけで「脚本を書き直したために6年も経ってしまった」らしい。この映画は3歳のエレニからはじまり、最後は2人の息子を戦争で失ったエレニが号泣するシーンで終わるが、この第1部だけでも2時間50分という長編。ヨーロッパ映画とハリウッド映画とが異質なことはよくわかっているが、このギリシャのアンゲロプロス監督の感覚はヨーロッパ映画の中でもさらに異質……？

さらにCGなどは一切使わず、水没する村などは、ホントに村をつくり、そこに大量の水を引き入れたとのこと。やることも徹底しておりホンモノ志向……？

### 美しいシーンとカメラワークの妙だが……

この映画では「長まわし」を基本とするカメラワークの妙を再三観ることができる。そして、「水」を中心とした美しいシーンが再三登場する。死亡したスピロスの葬儀シーンでは、エレニや村人たちがいかだや小舟に乗って粛々と水の上を進む姿が登場するが、その美しさは圧巻！

さらにエレニたち家族が水没した村から小舟で逃れていくシーンなども、ホントに静かにスクリーンが流れていくもので、じっとそれを観ているとまるでスクリーンに引き込まれていくような感じ……。

このような映像美が日本の溝口健二監督や小津安二郎監督などと共通する巨匠たちのカメラワークなのだろうと感心しながら観ていたが、それでもやはり2時間50分は長かった……。

### エレニの悲劇その1

場面は冒頭シーンの後、10年後のスピロスたちが築いたニューオデッサの村に移る。そのシーンは、成長したエレニが育ての母のダナエに連れられて舟に乗って戻ってきたところから。直接的な会話はないものの、エレニが秘かに別の村でアレクシスとの双子の子供を出産し、これを養子として預け、また村に帰ってきたことがわかる。

そしてスピロスとの結婚を拒否したエレニが、アレクシスとともに逃れていったのがテサロニキの難民村。このテサロニキもどこにあるのかわからないが、こ

ここでは最初は市民劇場の桟敷席に、そしてそこもスピロスに捜しあてられた後は白布の丘に……。

こんな風に、養父スピロスの追求を逃れながら、養子に出した双子の子供たちと真正面から会うこともできず、逃げ回って生活をしなければならぬことが、エレニの悲劇その1だ。しかし、この悲劇は、いつも傍にアレクシスがついていれば、そしてその後、次々と襲ってくる悲劇に比べればまだ堪えられる悲劇だった……？

## エレニの悲劇その2

ヒトラーとムッソリーニが台頭する中、ギリシャ国内でも將軍の軍事政権が台頭し、これが王と結託していく中で、労働組合のゼネストは弾圧され、アレクシスやその音楽仲間であるバイオリン弾きのニコス（ヨルゴス・アルメニス）、マネージャーでクラリネット吹きのジシス（ミハリス・ヤナトス）らの音楽活動にも暗い影が……。

そしてニコスは殺され、アレクシスは何とかアメリカへ旅立ったものの、エレニはニコスをかくまったことを理由として逮捕され、あちこちの監獄への投獄がくり返された。そんな中、エレニは……？

これが第2の悲劇だが、意識を失ったエレニがうわごとの中でくり返す「名前は何ですか。今度はどこに送られますか？ また違う制服ですね。看守さん、水がありません。石鹸がありません。子供に手紙を書く紙がありません」と何回もくり返すシーンの迫力はすごいもの！

## エレニの悲劇その3

エレニの悲劇はまだまだ続き、2人の息子も戦争と内戦のために死亡。さらに苦難の末にアメリカに渡ったアレクシスは、アメリカ軍に参加してアメリカの市民権を取得しようとしたが、結局は沖縄戦で死亡することに。これによってエレニは愛する人をすべて失い、完全に独りぼっちとなってしまったわけだ。

『エレニの旅』というタイトルで難民娘のエレニを中心として描かれる20世紀の歴史は、このような悲劇の連続であり映画はエレニの号泣するシーンでラスト

を迎えるが、実はそれは第1部の終了でしかないとのこと……。したがって、アンゲロプロス監督が描く『エレニの旅』はこれからまだまだ続くのだが、今後こんな悲劇が連続するのだろうか？

いくら「ギリシャ悲劇」がギリシャの売り(?)だといっても、こんな悲劇的な結末ばかりでは、第2部、第3部の行方が少し心配だが……？

## 総括

この映画の映像の美しさは圧巻で、ハリウッド映画とは全く異質の世界を堪能することができる。

また映像の流れと比較すればセリフが非常に少ないため、静かに流れる美しい音楽と相まって静かに時間が経っていくはず。アクションシーンばかり3時間近く続けば、メチャ疲れるだろうが、そうではないので2時間50分という長さも苦にならないが、それでもやはり長いことは長い……。

それは、全編「悲しさ一色」になっていることが大いに影響しているが、ただ一つフッと気が楽になるところは、アレクシスが得意のアコーディオンを弾いたり、ニコスやジシスを中心とする音楽家たちが集まって演奏するシーン。

そしてまた、「暗い時代」の中でも音楽に魅かれて集まり、市民たちがダンスに興ずるシーンも感動的で、ギリシャを含むヨーロッパでは音楽やダンスが1人1人の国民の心に根付いていることがよくわかる。これこそ文明国であり、文明社会というものだろうと実感。

さあ今後、アンゲロプロス監督の描く20世紀のギリシャの歴史は『エレニの旅』の中でどのように展開していくのだろうか？

2005(平成17)年6月7日記